

イメージの集団的共有化によるまちづくり支援手法確立のための基礎的研究 —群馬県新田町の都市計画マスタープラン作成プロセスを事例として—

The methodological study of the town planning process by adopting image concept in common with a group

—A case study of town planning process in Nitta town Gunma prefecture—

伊藤将司**・柴田貴徳***・青島縮次郎****

By Masashi ITO, Takanori SHIBATA and Naojiro AOSHIMA

1. 研究の目的と枠組み

平成4年の都市計画法改正によって定められた都市計画マスタープランの位置づけにも示されているように、これからの都市計画においては、市民参加を前提とした、市民が真に望む魅力的な（本稿では「感じがいい」と表現する）まちづくりが求められる。

通常の場合、まちづくりにおける行政と市民の合意形成や市民参画などは、論理的・言語的手段によってお互いに意見の調整を行い、ある一定の妥協点を探るという一連の行為を指す。しかしながら、個々人が「感じがいい」と認識する「都市のあり様」は、どちらかと言えば生理的に近い感覚であるため、顕在意識レベルの理論的・言語的手段では、必ずしも十分に明確化されるものではない。

このことから筆者らは、お互いの「感じのいい都市」の実現を目指していくまちづくりにおいては、潜在意識レベルでそのイメージの共有化を進めることが必要となるのではないかと考えている。

潜在意識を活用した研究には、大井¹⁾らの自由連想法を活用した生活環境に関する住民の認知やその構造に関する研究があり、また佐佐木²⁾、竹林³⁾らの言語連想によるイメージ構造化を基礎とした風土分析の一連の研究がある。一方、合意形成や住民意識把握に関する研究については岡崎⁴⁾の研究、加賀⁵⁾の合意形成過程におけるツール（CG）の有用性検証

の研究、あるいは斉藤⁶⁾の住民の描く都市イメージに関する研究があり、大いに参考となるものである。

しかし、潜在意識レベルにおける合意形成を主題とした研究はあまり例がなく、当然、潜在意識レベルにおける市民主体のまちづくり手法も確立されている状態ではない。そのことから、今後、潜在意識レベルを対象として、まちづくりの合意形成（イメージの共有化）手法の研究を進めることは極めて有用であると言える。

筆者らは、最終的に本基礎研究を発展させ、潜在意識レベルにおける「感じのいい都市」のイメージの共有化を図り、そのイメージを実現化する新たなまちづくり支援手法の基礎を確立したいと考えている。

なお、本研究では潜在意識を図-1に示すユングによる心の構造に基づいて考えており、潜在意識が個人的潜在意識と集合的潜在意識に分かれていることを前提として認識している。

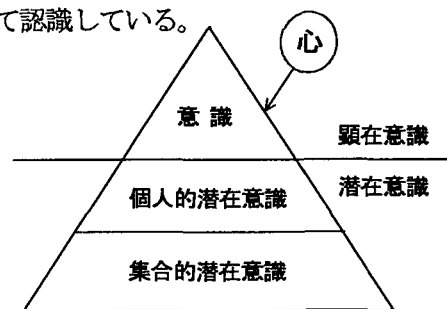


図-1 ユングによる心の構造

2. 本稿の構成

本稿では、第一に、個人的潜在意識のイメージ共有化手法を確立していくための基礎的研究として、3つの課題検討を行っている。すなわち、①個人的潜在意識レベルでの「感じのいい都市」のイメージ把握、②イメージの再編プロセス、③潜在意識レベルからのイメージの共有化である。この時、③については、心理学の潜在意識把握手法の一つであるP-Fテストを援

* キーワーズ:市民参加、計画手法論、合意形成

** 正会員 株式会社 群馬山コンサルタント 東日本事業部
(〒136-0071 江東区亀戸 2-25-14)

TEL:03-3683-0151、FAX:03-3683-0196

*** 正会員 学博 株式会社 群馬山コンサルタント 本社事業部
(〒802-0062 北九州市小倉北区片野新町 1-11-4)

TEL:093-931-3105、FAX:093-951-8660

****フェロー 工博 群馬大学工学部建設工学科

(〒376-8515 桐生市天神町 1-5-1)

TEL:0277-30-1650、FAX:0277-30-1601

用して、ある計画案に対する潜在意識を「満足」、「不満足」として把握し、「不満足」を「満足」へ転換させていくことによって、当該計画案についての合意形成、つまりある計画案で形づくられるイメージの共有化を図る手法確立のための検討を行っている。

第2に、これらの検討結果を受けて、個人的潜在意識のイメージ共有化のための方向性を提起する。

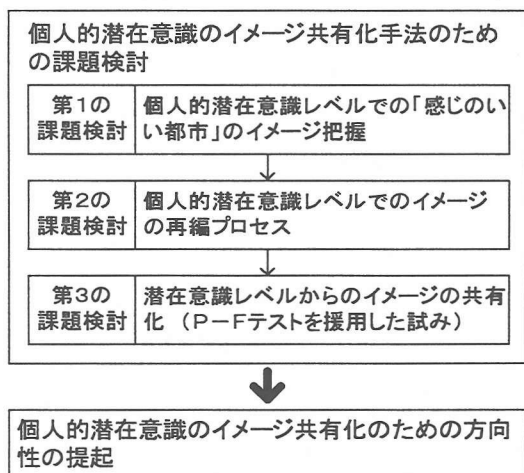


図-2 本稿の構成

3. 個人的潜在意識のイメージ共有化手法のための課題検討

(1) 第1の課題検討 一個人的潜在意識レベルでの「感じのいい都市」のイメージの把握

既述のように、市民参画を進める上で、ある目標となる都市や地域（もしくは地区）の望ましいイメージは、頭在意識レベルの論理的・言語的手段ではなく、むしろ潜在意識レベルの直感に近い感覚の働きにより形成される、と考える方が自然である。そこで、第1の課題検討として、この「感じのいい都市」のイメージが、どのような潜在意識との関わりで形成されるのかを、一つの試みとして実験的に明らかにした。

本稿では、視覚的情報が与えられた時のイメージ形成について、次のような検討を試みている。

被験者にイメージ写真約20枚を提示し、その中の写真から、あまり深く考えず直感的に「いいなあ」と感じた写真1、2枚を選んでもらい、その写真について、良いと感じた理由、その写真から連想する個人的なエピソードをヒアリングした。なお被験者は首都圏在住の20代から50代の男女約20名である。

実験の結果、表-1に示すように、個人の「いいなあ」と感じる風景はまちまちであるが、選んだイメ

ージ写真に関連して何らかのエピソードを連想していることが明らかになった。そのエピソードは子供の頃よく遊んだ場所や、よく行った祖父の家などの原体験・原風景、子供の頃憧れていた風景、最近の楽しい思い出を連想させる風景等である。

これらのことから、個人の楽しい体験が潜在意識となり、「いいなあ」と直感的に感じるイメージを形成させているのではないかと考えられる。

したがって、個々人の「感じのいい都市」のイメージを共有化する場合は、その原風景や原体験等を把握し共有化していくのが1つの方法であると考えられる。

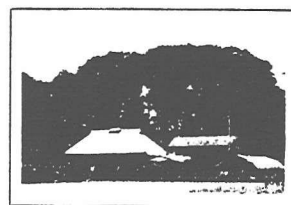
但し、原風景や原体験に基づかない、例えばバーチャルシティのような、従来にない未体験かつ革新的な「感じのいい都市」の可能性も考えられるため、今後これらに基づく「感じのよさ」のイメージ把握手法についても課題として考慮していく必要がある。

表-1 イメージの把握事例

被験者	理由	連想するエピソード
Aさん 20代女性 出身: 沖縄 選択写真①	落ち着きや静けさを感じるので	昔、このような風景の中で遊んだ思い出がある。
Bさん 30代女性 出身: 都内 選択写真②	今はあまり見られない寄棟の家と屋敷林がいい	夏休みによく行ったおじいちゃんの家を思い出す。何かワクワクしてくる。
Cさん 20代男性 出身: 都内 選択写真③	子供が安心して遊べるので	自分が小さい頃はこのような遊ぶ場所がなかった。こんな所がほしかった。
Dさん 40代男性 出身: 富山 選択写真④	なくなりつつある風景だから	学生時代にデートをした場所に似ている。



写真①



写真②



写真③



写真④

(2) 第2の課題検討 一個人的潜在意識レベルでのイメージの再編プロセス

(a) イメージ再編のプロセス

市民による計画参加が行われる場合、参加者はそ

の行為によって場と時間を共有する。そして、そこで開催される話し合いやワークショップ等を通じて、各個人は自己表現を行うとともに、他者の発言や提供された資料等により外的な刺激を受ける。その外的な刺激に対して、「気になる一言」「何かピンと来た」といった直感的な感性のゆらぎが起こる¹⁴⁾¹⁵⁾。そしてそれが思考のざわめきを導き、論理的になぜそのことに刺激を受けたのかという自問自答を通じて自己のゆらぎを論理的に考え、イメージが再編されるものと考えられる（図-3）。

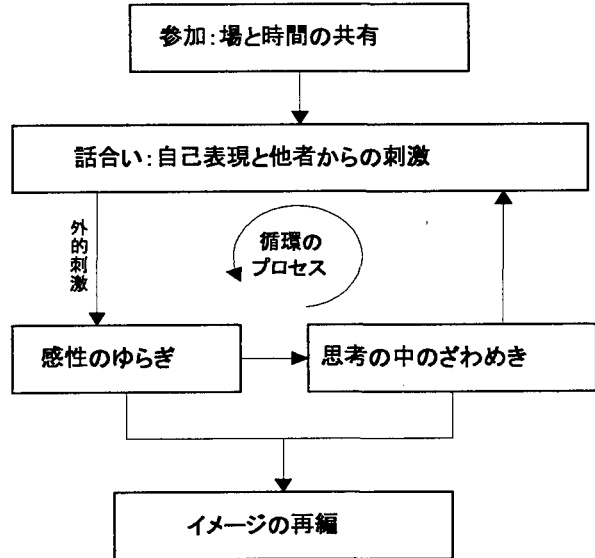


図-3 イメージ再編のプロセス

(b) ケーススタディ

このプロセスを事例で確認するために、ケーススタディとして、群馬県新田町の都市計画マスタープラン策定業務のために組織された作業部会での将来都市イメージの再編に関する試みを取り上げる。

図-4に示すように、初回の作業部会では、メンバー全員に「わたしが町長だったら」というテーマで、1人ひとりに個々人の将来都市イメージについて発言をしてもらい、お互いに各個人の抱えているイメージを確認し合った。その後、全体構想や地域別構想等、都市計画マスタープランの策定手順に従って計10回作業部会を開催した。そして、最終回にその時点での将来の都市イメージについて、メンバーにヒアリング調査を行い、初回と最終回でのイメージの変化、そのきっかけとなった外的な刺激（言葉、体験等）、その時に考えた事や話した内容等についての把握を行い、イメージの再編のパターン分類、再編の構造と各要素の把握状況について整理した。

その結果、図-5の事例に示すように参加者

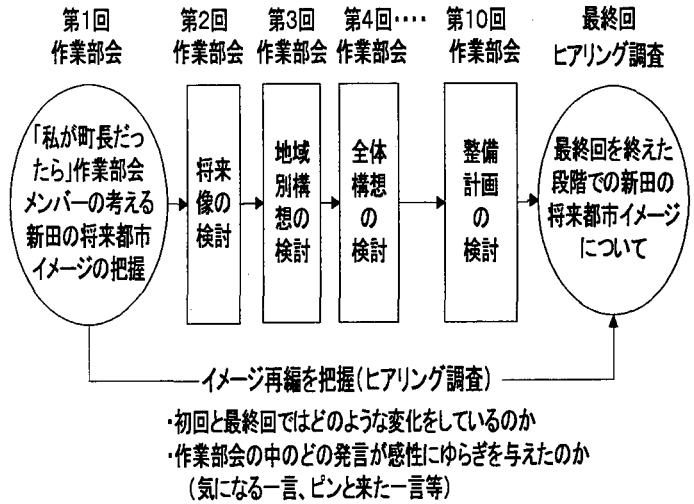


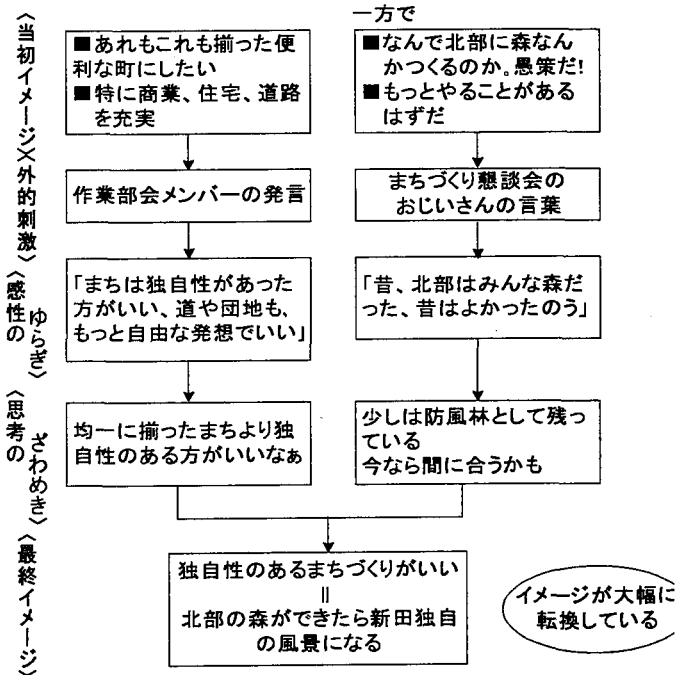
図-4 作業部会の流れ

それぞれにイメージ再編が起きており、「外的刺激」、「感性のゆらぎ」、「思考のざわめき」といったプロセスを経ながらイメージが再編されていることが明らかになった。また、表-2に示すように外的刺激として同じ場を共有している参加者の生の言葉が最も影響力が大きく、感性のゆらぎは地域アイデンティティによって引き起こされ、思考のざわめきを経て、再認識、付加、転換といったイメージの再編が起きていることが明らかとなった。

表-2 イメージ再編の各要素

外的刺激	感性のゆらぎ	思考のざわめき
■ 同じ場の共有者からの発言 (6人) ■ アンケート結果 (2人) ■ その他資料 (2人)	■ アイデンティティの再発見 (6人) ■ 住民参加の重要性 (2人) ■ その他 (2人)	■ 再認識＝明確型 (1人) ■ 付加型 (2人) ■ 転換型 (2人) ■ プロセス重視型 (3人)

<イメージ転換型の例>



＜イメージ付加型の例＞

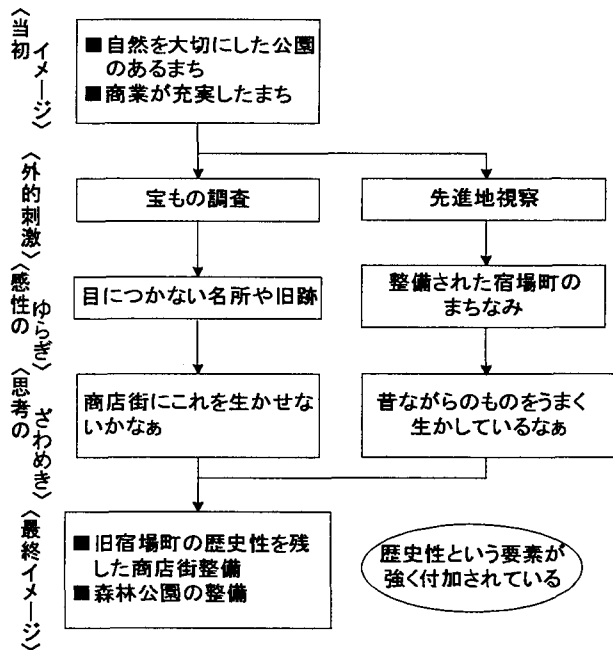


図-5 イメージ再編プロセスの事例

（c）結果の考察

イメージを再編させた要因やイメージが再編しやすい事項等がある程度把握でき、普遍的な整理によって手法として確立されれば、市民の計画参加等で合意形成が困難な状況においても、個々人のイメージが再編されやすい場面を作り出すことによって、対立している状況を変化させ、合意に至る可能性を見いだすことができるものと考えられる。

但し、この合意形成手法は、将来の変化についての方向性を共有することを目的とする場合（都市計画マスタープラン、街並み協定等）への適用性が高く、一部の市民が受忍を求められ、受忍の納得を目的とする場合（広域的根幹的施設等）の合意形成には、直接的には適用しにくい面もあると考えられる。

（3）第3の課題検討ー潜在意識レベルからのイメージの共有化（P-Fテストを援用した試み）

（a）P-Fテストの特徴

心理学における潜在意識を顕在化させる手法¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾としては、投映法、自由連想法、催眠、夢の解釈等がある。特に、投映法は人格検査に用いられる手法で、視覚刺激によるもの、言語刺激によるもの、描画によるもの、劇によるものに分類される。

既往研究においては、先述したように大井ら¹⁾、佐佐木ら³⁾の自由連想法による研究があるが、これらは連想されるキーワードを分析することによって、被験

者の意識構造を把握しようとするものである。そこで本検討では、潜在意識レベルでの合意形成に着目するため、ある計画案に対して被験者の感じる潜在意識を「満足」、「不満足」として把握し得るP-Fテスト（Picture Frustration Test）を援用するものとした。

P-Fテスト¹¹⁾¹²⁾¹³⁾はローゼンツアイク（精神医学者）によって考案された視覚刺激による投映法で、本来は人格検査等に用いられる。この手法の特徴は、線画を用いることにより個人的潜在意識に、ある事象に対する刺激を柔らかく与えることができるため、回答者のありのままの気持ちが反映されることにある。具体的には線画を用いた絵（左側の話かけている人物が右側の人物に何らかの意味で不満を起こさせる場面：図-6）を表示することにより、回答者の潜在意識にある欲求不満を導き出すものである。



図-6 P-Fテストの線画

導き出された結果は、不満をどのように感じるかという不満の反応タイプとその不満を何に向けて示すかという不満の方向性に分類できる。不満の反応タイプでは、何を不満に感じるのかを表すタイプ（不満指摘型）と、概ねの満足を表すタイプ（満足型）と、不満の改善を強調するタイプ（不満改善型）の大きく三つに分類できる。また、不満の方向は人、物、状況等の他に付けられる外罰方向、自分自身に向けられる内罰方向、不満の方向を示さない無罰方向に分類できる。

P-Fテストでは、得られた回答結果を不満の反応タイプと不満の方向によるマトリックスに分類することにより、潜在意識による欲求不満の構造を分析することができる。通常は専門家がこれらのマトリックスに分類された結果を詳細に読みとり人格判断等を行っていくものであるが、本研究ではP-Fテストによる厳密な調査解析を行うことが目的ではなく、あくまでもその考え方を活用して潜在意識にどのような不満

変更と、P-Fテストの実施・分析を繰り返すことによって、当該計画案をより望ましいものへ向上させるとともに、合意形成、つまりある計画案で形づくられるイメージの共有化を進めることが可能となると考えられる。

さらに、P-Fテストの結果を分析することで、行政に要求している整備内容（外罰方向）や、各個人が責任を感じている内容等（内罰方向）を項目別に把握することができる。このことにより、例えば、管理項目に関して内罰方向である事柄は、住民が管理に自主責任を感じている事柄と言え、協力関係を図りやすい事柄と判断できる。このような整理を行えば、パートナーシップを図りやすい事柄を的確に把握できる。

但し、P-Fテストは潜在意識レベルの満足の度合を把握する手法であるため、評価対象が具体的に評価できる事柄であり、かつ、満足の度合を把握する項目に漏れがないように数多くの質問を行うため、ある程度限定された評価対象であることが望ましい。したがって、具体的な判断材料が多く、ある程度検討範囲が限定的な、身近な都市施設整備の検討等には適しているものといえるが、都市の将来像のような漠然とした方向性の検討や、検討内容が広いまちづくり構想等の検討のためには解決すべき課題がある。

4. 個人的潜在意識のイメージ共有化のための方向性の提起（将来変化の方向性を共有する場合への適用）

（1）手法の適用条件の整理

市民参加による合意形成はその参加目的により、①利用者ニーズを把握し施設の質の向上を目的とする場合（身近な都市施設等）、②将来の変化についての方向性を共有することを目的とする場合（都市計画マスタープラン、街並み協定等）、③一部の市民が受忍を求められ、その受忍の納得を目的とする場合（広域的根幹の施設等）に分類できる。ここに提起する手法はこのうち、②についての適用を前提とするものである。

（2）手法確立のための方向性の提起

（a）個人的潜在意識レベルでの「感じのいい都市」のイメージ把握

地域アイデンティティは「いいなあ」と直感的に感じるイメージに深く関わっていることが明らかとなった。したがって、「感じのいい都市」のイメージの集団的共有化を進める場合、まず地域のアイデンティティを検討素材として抽出する必要がある。

筆者らが携わった群馬県新田町都市計画マスタープランでは、新田らしいイメージの共有化を図るため、新田の風土性を感じさせるものを現地踏査、宝物（大好きな場所等）調査、住民との話し合い等の方法により把握し、新田らしいイメージ写真を数十枚用意した。そして住民懇談会の席で、参加者が「いいなあ」と直感したイメージ写真を抽出し、これを基軸に将来像をとりまとめている。

このような取り組みを通じて一応の成果は得たが、地域アイデンティティの把握をさらに深化させていく必要がある。すなわち表面上に見えている素材はもちろんであるが、地域に住む人にとって、意識をしなくてもなじむ風景や場所、事柄等を把握する必要がある。これらは、地域の集合的潜在意識レベルの地域アイデンティティと言うことができる。これらは、老人の昔話、習慣やしきたり、歴史や文化財、地域を代表する場所、自然の成り立ち、生活様式等の中にあるものと考えられる。

また、個人の持つ「感じのいい都市」のイメージは、過去の楽しい体験に基づいていることが明らかになった。「感じのいい都市」のイメージの共有化を進める場合、参加者の「感じのいい都市」のイメージの把握と同時に、その奥にある原風景や原体験等を把握する必要がある。

また、視覚的のみならず五感による「感じのいい都市」のイメージを把握し、その構成要素を明らかにしておく必要がある。

これらの把握により、効果的に共有化を図ることができるものと考えられる。

（b）個人的潜在意識レベルでのイメージの再編

次に地域アイデンティティに基づく検討素材と、「感じのいい都市」のイメージ要素を活用しながら、個人的潜在意識が自由闊達に働くように刺激を与える場を提供することが必要となる。

そのためのひとつの具体例としては、インターネット上での参加の場の提供が考えられる。インターネット上では相手を全く意識することなく、匿名による

コミュニケーションが可能となる。そのため、個人の深層に無意識的に隠されていたものがメッセージの中に開放され、相互の潜在意識レベルの交流を可能にするものであると考えられる¹⁶⁾。

また、多量のスライド（写真や絵）等により潜在意識レベルのイメージを抽出する手法も考えられる。多量なスライドを連続的に見せ、それらから直感的に「いいなあ」と感じるものを数点選び出すことによって、言語的・論理的判断を極力排除した、直感的イメージの抽出、すなわち個人的潜在意識レベルでのイメージを抽出できるものと考えられる。

このような手法の有意性を明らかにしていくためにも、今後インターネットやスライドを活用した手法を実証検証していく必要がある。

これらにより、潜在意識レベルでのイメージの再編が一層スムーズに行われるようになると考えられる。

（c）潜在意識レベルからのイメージの共有化

インターネットやスライド等の手法による場合、あるテーマや素材に関して、そこに出されるメッセージ（文字や絵や写真）やイメージスライドを、特定の意味の連鎖として関連づけを行っていくことにより、そのテーマに関する何らかの収束の方向が見え、イメージの共有化が可能になるものと考えられる。

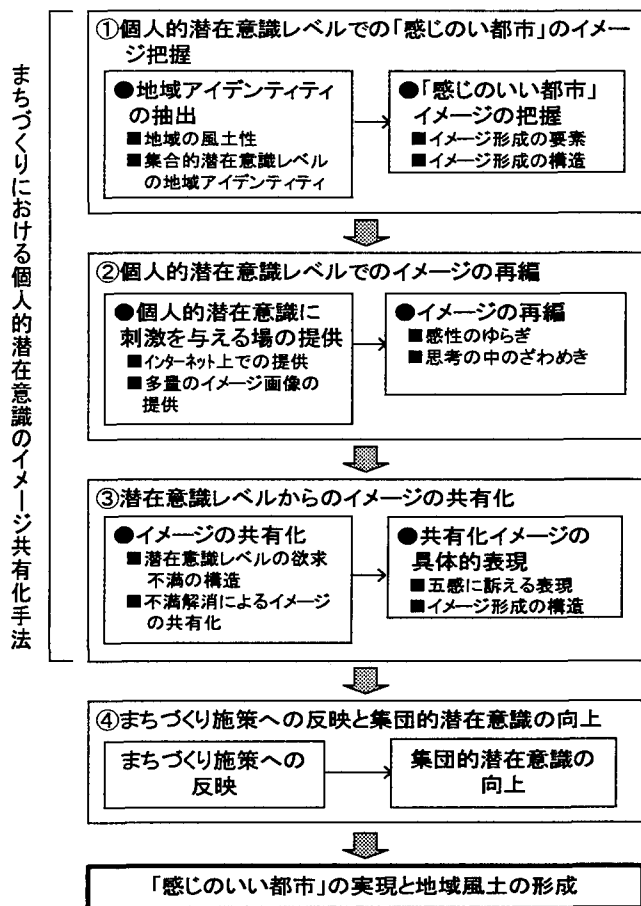
これら共有化されたイメージについては、それらを具体的に表現する方法が重要となる。それは共有化されたイメージをまちづくり施策に反映していくための伝搬方法でもあり、第三者に感性のゆらぎを与える刺激でもある。したがって、できるだけ個人の潜在意識に働きかける表現方法が望ましく、五感に訴えていく媒体である必要がある。例えば、バーチャルリアリティ（見る・触る・嗅ぐ等）やモニタージュビデオ（C G）等の活用が考えられる。

これらは、その表現ツールの開発や簡易化等を行い、手軽に利用できる手段として一般化させていく必要がある。

（d）まちづくり施策への反映と集団的潜在意識の向上

共有化されたイメージに基づき、まちづくり施策を実施する段階では、まちづくりのイメージの共有化が図られているため、原理的には、イメージの実現化のための具体的事業手法と財政的手当の問題に収束するものと考えられる。但し、共有化イメージを具体化するなかで、個人の潜在意識レベルでの改善点や不満

等を把握し、この段階において微修正を加える必要がある。



図ー7 個人的潜在意識のイメージ共有化のための方向性

5. まとめ

本稿では、第1に「感じのいい都市」は原体験・原風景に基づいていることを明らかにした。また、第2に感性のゆらぎ、思考のざわめきの循環のプロセスを経てイメージ再編が起こること、その再編には地域アイデンティティが深く関与していることを明らかにした。第3にはP-Fテストの援用により潜在意識レベルの意識把握とそれに基づく合意形成の有用性を検証した。そしてこれらで得られた知見を整理しつつ、個人的潜在意識レベルのイメージ共有化手法のための方向性を提起した。

6. おわりに

人間の潜在能力には、潜在意識にイメージされた事柄を実現していく力があると考えられている。したがって、個々人の潜在意識に共有化されたイメージが伝搬し、市民の潜在意識レベルに高められた場合、個々

人の顕在意識の影響から離れたところで、集団的潜在意識は、その共有化されたイメージを独自に自己実現していくのではないかと考えられる。

筆者らは、今後個人的潜在意識レベルでのイメージの共有化をさらに発展させ、集団のイメージの共有化の研究をすすめて行きたいと考えている。このような観点からまちづくりの支援ができるならば、住民が真に望む「心地いいまち」を、この先何百年も残りつづける地域の風土として形成することができるものと考えられる。

(参考文献)

- 1) 大井絃・宮本定明・阿部治・勝矢淳雄：生活環境に関する住民の認知の拡がり構造，土木学会論文集 第 389 号／IV-8, PP.83～92, 1988
- 2) 佐佐木綱：地域コンプレックスの概念と計画，風土分析と地域計画（第 54 回関西地区大学合同セミナー記念），PP.1～22, 1985
- 3) 佐佐木綱・堀田治・竹林幹雄：文学を利用した地域計画に関する考察—「風の又三郎」に見るイメージ連想の分析，土木計画学研究・講演集No.12, PP.143～149, 1989
- 4) 中川浩二・竹林征三・鈴木義康・茂原朋子：地域資源のイ

メージ構造化と基本コンセプト創出に関する風土工学的研究，土木計画学研究・講演集No.18(1), PP.9～12, 1995

- 5) 鈴木義康・竹林征三：個性的な地域づくりと風土工学的アプローチに関する研究，土木計画学研究・講演集No.21(1), PP.77～80, 1998
- 6) 岡崎篤行・原科幸彦：歴史的町並みを活かしたまちづくりにおける合意形成過程に関する事例研究，1995 年度第 30 回日本都市計画学会学術研究論文集, PP.337～342, 1995
- 7) 加賀有津子・中濱公生・濱田士郎・山口修一・山西弘剛・笹田剛史：街路事業における住民との合意形成方法について，土木計画学研究・講演集No.21(2), PP.375～378, 1998
- 8) 加賀有津子・中濱公生・濱田士郎・山口修一・樋口賢・笹田剛史：街路事業における住民との合意形成方法について（その 2），土木計画学研究・講演集No.22(1), PP.1～4, 1999
- 9) 斉藤和夫・石崎裕幸・田村亨・榎谷有三：都市のイメージ構造と地域特性の関係に関する研究，土木計画学研究・論文集No.14, PP.467～474, 1997
- 10) 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保：心理用語の基礎知識，有斐閣，1973
- 11) 星忠通・宇留野藤雄・岡村一成・岸田孝弥：心理学，巖波書店，1991
- 12) 安藤公平・妻倉昌太郎・大村政男・山岡淳：こころの科学，駿河台出版，1965
- 13) 住田勝美・林勝造・一谷彊：改訂版 P F スタディ使用手引，三京房，1964
- 14) 合意形成研究会：カオスの時代の合意学，創文社，1994
- 15) ミシェル・ドラニ著・寺内礼監訳：イメージの心理学，勁草書房，1989
- 16) 森岡正博：意識通信，筑摩書房，1993

イメージの集団的共有化によるまちづくり支援手法確立のための基礎的研究

—群馬県新田町の都市計画マスタープラン作成プロセスを事例として—

伊藤将司**・柴田貴徳***・青島縮次郎****

本研究では第一に、視覚的情報によって形成される「感じのいい都市」のイメージ形成要因を実験的に把握整理した。また第二には、個々人の潜在意識レベルでのイメージ共有化の前段となる、個人の持つイメージの再編プロセスの研究を行った。そして第三に、心理学の潜在意識把握手法（P-F テスト）を援用した個人的潜在意識の把握及び、合意形成後の意識構造の把握を行った。これらの基礎的研究によって得られた知見を整理しつつ、個人的潜在意識レベルでのイメージ共有化手法のための方向性を提起した。

The methodological study of the town planning process by adopting image concept in common with a group

—A case study of town planning process in Nitta town Gunma prefecture—

By Masashi ITO, Takanori SHIBATA and Naojiro AOSHIMA

This study consists of three main parts. The first part discusses influential factors for image construction process when she/he is constructing own image of “a favorable city”. The second part scrutinizes the restructuring process of image construction of an individual. In the third part, subconsciousness analysis methods (such as P-F test) generally used in psychological studies are applied into the field of urban planning in order to examine individual subconsciousness, and it discusses a process of forming consensus within a group. Finally, this study considers implications from above discussions, that aims to propose an analytical framework on human process of group consensus with individual subconsciousness, and it's tasks for further development.